

右京六条二・三坊の調査

―第167次

1 はじめに

調査地は飛鳥川の東岸、藤原京右京六条二・三坊にあたり、西二坊大路の想定位置にあたる。調査区の25m南の第60－8次調査（『藤原概報 20』）では、西二坊大路東側溝について、その可能性がある古代の溝2条（SD6570・SD6565）を確認している。西側溝については想定位置付近に平安時代後半の溝2条（SD6579・SD6580）を検出しており、これが西側溝に完全に重複して消滅した可能性を指摘している。しかし、東西いずれも条坊側溝の確定には至らず、周辺におけるさらなる調査がまたれていた。調査地は弥生時代の集落遺跡である四分遺跡の西南部にもあたる。関連遺構の検出および遺跡範囲の確定が期待された。

調査区は藤原京西二坊大路の検出を主たる目的として、東西20m×南北13mの範囲で設定し、飛鳥川側の遺構の状況を確認するために調査区の西に東西10m×南北2mのトレンチを設定した。調査面積は280㎡、調査期間は2010年10月7日から11月29日までである。

2 基本層序

調査地は飛鳥川の東岸に沿う低地に位置する田地である。調査地の現地表面は標高72.2mで、飛鳥川河床の標高とほぼ同じである。低地となった付近一帯は東南から北西へゆるやかに傾斜する地形である。

層序は上から現代の表土、青灰色粘質土（床土）、灰褐色粘質土（中世の包含層）、黒色砂質土（弥生時代の包含層）、黄褐色砂質土または砂礫層の地山（弥生時代以前の堆積・無遺物）である。灰褐色粘質土の上面では耕作用の素掘り小溝を多数検出した。古代の堆積土および整地土層は、中世に削平を受けたためか、調査区内では確認できなかった。黒色砂質土の上面および地山上面が遺構検出面である。遺構検出面の標高は調査区東端で71.6m、調査区西端で71.2m、トレンチ部分の西端で71.1mである。遺構検出面は南北溝SD10931・SD10932以東はほぼ平坦で、溝を境に20cmほど西側が低くなり、溝以西は西に向かって緩やかに傾斜する。

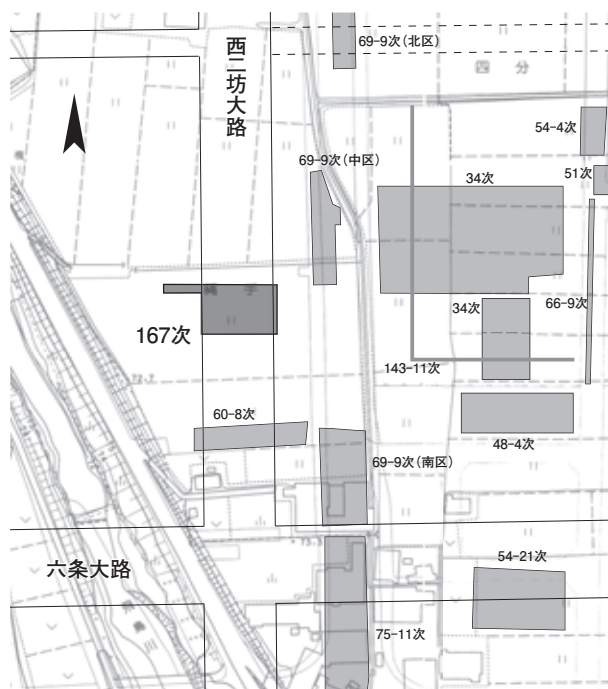


図118 第167次調査区位置図 1:2000

また、黒色砂質土上面における弥生時代の遺構検出は困難を極めたため、調査区東南隅と南側中央で下層調査区を設定し、黒色砂質土を掘削し、地山上面で弥生時代の溝2条を検出した。

3 検出遺構

黒色砂質土上面および地山上面で、弥生時代から中世の遺構を検出した。検出した遺構は、中世の溝8条、柱穴3基、土器埋納坑1基、土坑2基、古代または中世の溝3条、古墳時代の溝1条、土坑1基、弥生時代の溝3条、土坑4基である。以下、主要な遺構について述べる。

古代から中世の遺構

南北溝SD10930 調査区東側で検出した南北溝。幅は最大で1.6m、深さは0.3mを測る。途中でSD10940に分断されるが、長さ12m分を検出した。方位は北で西に少し



図119 第167次調査区全景（東から）

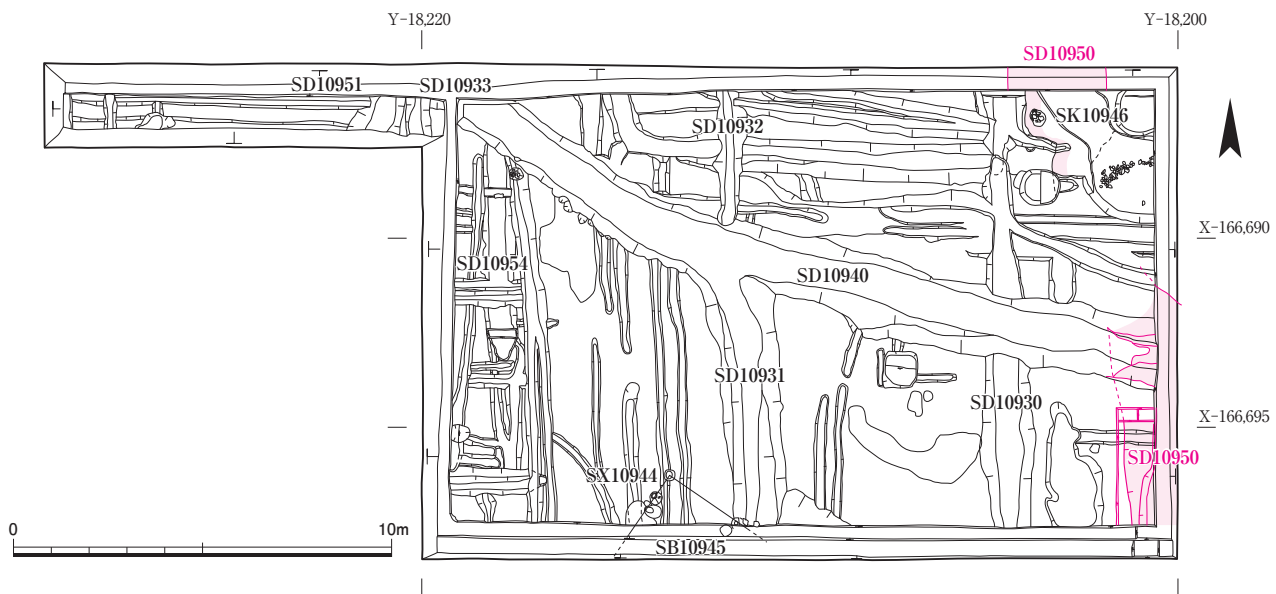


図120 第167次調査遺構図 1:200

振れる。溝埋土の上層は瓦器など中世の土器を含み、中世以降に埋没したと考えられる。埋土の最下層は小礫と粘土が底に詰まるようにして堆積しており、その間から少量ではあるが古代の土器が出土している。遺構の重複関係から、SD10940より古いと考えられる。

南北溝SD10931 調査区の中ほど、SD10940より南で検出した南北溝。溝は幅1.5m、深さ0.5mを測り、7m分を確認した。北で西に少し振れる。溝はSD10940と遺構検出面での明瞭な重複関係や、溝埋土の明瞭な違いが見られず、また、SD10940との交点では、西南角が丸く削り取られている。以上の点から、溝はSD10940と同時期に機能し、埋没した可能性がある。調査区南端では、溝の底部より軒平瓦が出土している。また、溝埋土の上からSB10945の柱穴が掘りこまれており、溝の埋没時期は平安時代以前と考えられる。

南北溝SD10932 調査区中ほど、SD10940より北で検出した南北溝。溝は幅0.4m、深さ0.3mを測る。長さ3.5mを確認した。溝の形状や底のレベルが異なることから、SD10931と一連で開削されたものではないと考えられる。遺構の重複関係が明瞭ではなく、埋土の様相も似ることから、SD10940と同時期に機能し、埋没した可能性がある。

南北溝SD10933 トレンチ部分の東端で検出した南北溝。幅は0.3m、深さは0.2mを測り、長さ1m分を確認した。溝埋土からは平安時代の土器が少量出土しており、平安時代に埋没したようである。

東西大溝SD10940 調査区を横断する東西溝。幅は最大で2.2m、深さは0.8mを測り、長さ19m分を確認した。

調査区西半では後世の削平により、深さ0.1m程が残存する。溝の底部には小礫と粘土が詰まり、その間からもわずかに土器片が出土している。先述したように、SD10931と同時期に機能し、埋没した可能性がある。

建物SB10945 調査区南端で検出した平安時代の掘立柱建物。後述するSX10944と一連であると考えられる。柱掘方は径30～50cmの円形または楕円形を呈し、深さは20cmが残る。柱筋は方位に対しほぼ45°の振れをもつ。柱間は東西方向2.1m、南北方向1.2m。柱穴のうち1穴がSD10931と重複しており、SD10931埋没以降の遺構である。

土器埋納坑SX10944 SB10945の柱穴北に隣接している平安時代の小土坑。平面は径30cmの円形を呈し、深さ25cmが残る。埋土の上部から11世紀後半の土師皿が、下面が上に向いた状態で出土した。

古代以前の遺構

下層南北溝SD10950 東南隅の下層調査区で検出した弥生時代中期の南北溝。溝は幅2.5m、深さ0.6m、長さ12m分を確認した。調査区東南隅では溝の西肩のみを検出し、調査区東壁断面で東肩を、北壁断面では両肩を確認した。溝は途中で西に屈曲し、北側へ抜ける形になる。溝埋土の上層には弥生時代中期のものを中心とした弥生土器が多数含まれる。規模からみて、周濠など集落の区画に関係する遺構の可能性がある。

土坑SK10946 調査区北東隅で検出した弥生時代中期の土坑。最大幅1.3mの不整形な平面を呈す。深さは20cmが残る。埋土には拳大の礫と弥生時代中期の土器が多く含まれる。遺構の重複関係から、SD10950より新しい遺

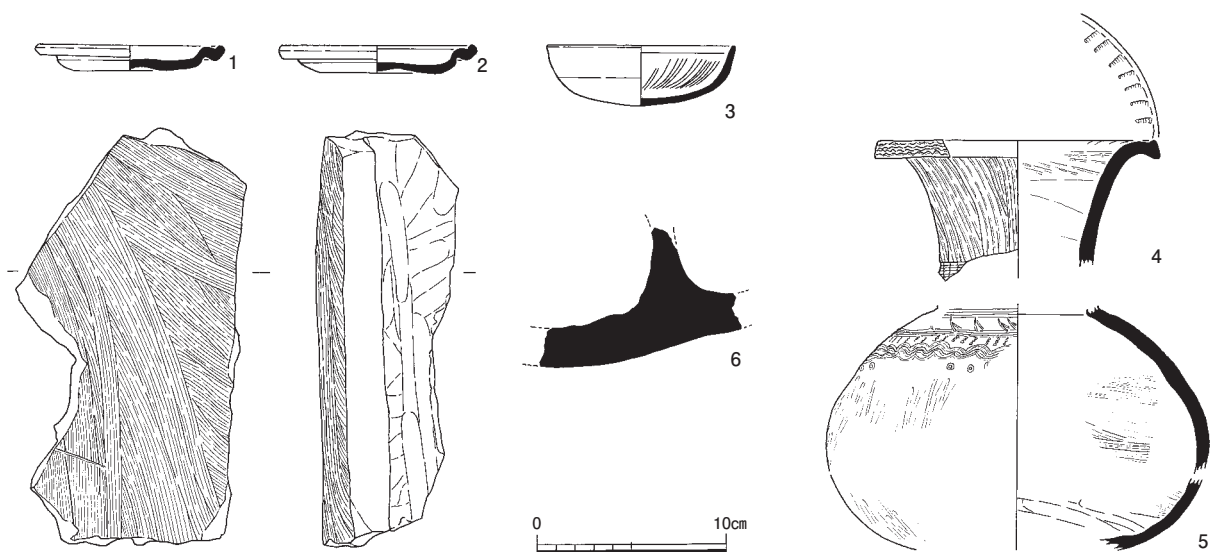


図121 第167次調査出土土器 1：4

構と考えられる。

南北溝SD10951 トレンチ部分の東端で検出した南北溝。幅は最大で1.4m、深さ0.3m、長さ1m分を確認した。北で少し東に振れる。遺構の重複関係から、溝はSD10933より古い。溝埋土からは弥生時代末期の土器が多数出土した。

南北溝SD10954 調査区西端で検出した古墳時代後期の素掘り溝。幅は最大で0.9m、深さは0.1mが残存し、長さ5.5m分を確認した。北でわずかに西に振れる。溝埋土からは形象埴輪の破片が出土している。（番 光）

4 出土遺物

土 器 調査区から整理用木箱11箱分の土器が出土した。弥生土器と中世の土師器皿・瓦器の破片が多い。弥生土器は全体に中期のものが多く、後期の土器が少量出土している。その他に埴輪や古代の土師器・須恵器、中世の土師器羽釜、瓦質土器播鉢、近世磁器がある。全体に細片が多く、図示できるものは少ない。



図122 SD10950検出状況（北東から）

SX10944からは土師器皿（1・2）が出土した。1は口径9.6cm、器高1.4cm、2は10.2cm、器高1.5cm、いずれもコースター形で全体に厚ぼったいつくりである。11世紀後半と考えられる。SD10930最下層からは土師器坏C（3）が出土した。口径9.9cm、器高3.2cmで径高指数32.3、やや浅い形態であり、外面調整はa0手法。なお上層からは瓦器が出土している。SK10946では弥生土器壺（5）が出土している。胴部上半と下半は接合しないものの、胎土や調整が類似することから同一個体と考えられる。胴部上半外面には上から2帯の櫛描直線文とその間に扇形文、そして櫛歯列点文、波状文、最後に竹管文を施す。内面は上半下部に横方向のハケ調整が確認できる。胴部下半は外面が縦方向のミガキ調整、内面は横方向のハケ調整で下部は横方向のナデ調整を施す。全体に胴部下半が膨らむ形態であり、内面の頸部と胴部の境は明瞭である。文様構成から見て、畿内第Ⅱ様式からⅢ様式への過渡的な資料と考えられる。SD10950では中期の弥生土器広口壺・細頸壺・甕・鉢・高坏が出土しているが、ここでは広口壺を図化した（4）。頸部は縦方向に目の粗いハケ調整後、櫛描簾状文、口縁端部には櫛描波状文を施す。内面には頸部に左上がりの斜めハケ調整、口縁部に櫛描列点文を施文する。Ⅲ様式のものと考えられる。この他にⅣ様式の壺・鉢がわずかに出土している。SD10954からは埴輪（6）が出土した。盾形埴輪あるいは石見型埴輪と考えられるが、線刻表現が希薄なことから、後者の可能性が高い。また円筒部上端を盾面側が高くなるよう斜め下方向へ直線的に切り欠いている点から、形象部上半と考えられる。鰭部は円筒部側面にナデ



図123 第167次調査出土瓦 1:3

により貼り付け、縦方向にナデ調整を施す。盾面は右下がりの斜めハケ調整ののち、横方向の直線的な線刻を下半に1条施す。
(高橋 透)

瓦類 軒丸瓦1点、軒平瓦4点、丸瓦22点(3.12kg)、平瓦58点(9.09kg)が出土した。軒丸瓦は日高山瓦窯産の6275E(図123-1)。軒平瓦には重弧文2点(3)と、牧代瓦窯産の6647Cb(2)のほかに、中世に属するものが1点ある。

重弧文軒平瓦のうち1点は顎部分のみであるため弧数不明。もう1点は三重弧文(3)で、弧線を型挽きで施すものである。凹線は浅く幅狭であり弧線は低く丸みが強い。凹面にはわずかに布目が残るが入念な縦ナデが、凸面には縄叩き後に横ナデが施されている。にぶい黄色を呈し、精良な胎土をもちいる。なお、この三重弧文軒平瓦に酷似する資料が、本薬師寺でおこなわれた第143-3次調査において完形で出土しており、本薬師寺創建瓦のひとつと考えられている(『紀要2007』)。

また、牧代瓦窯産の軒平瓦6647Cbも本薬師寺創建瓦であり、本調査区から本薬師寺創建瓦が出土することは注目しておいてよい。
(森先一貫)

その他 調査区各所からサヌカイトの打製石器片(総重量189.3g)が出土した。石鏃1点、石錐2点、スクレーパー1点の他に器種を特定できるものはない。いずれも古代以降の溝埋土、および包含層からの出土である。また、弥生包含層から不明木製品1点、中世の溝や包含層から不明鉄製品3点(総重量45.8g)が出土している。その他、中世の包含層から焼けた骨片が1点出土した。

(廣瀬 覚・山崎 健)

5 まとめ

今回の調査の主たる目的であった藤原京西二坊大路の東西両側溝については、南北溝SD10930・SD10933を検出したが、埋没時期や遺構の位置等の要因により、条坊側溝と確定するには至らなかった。東側溝については、

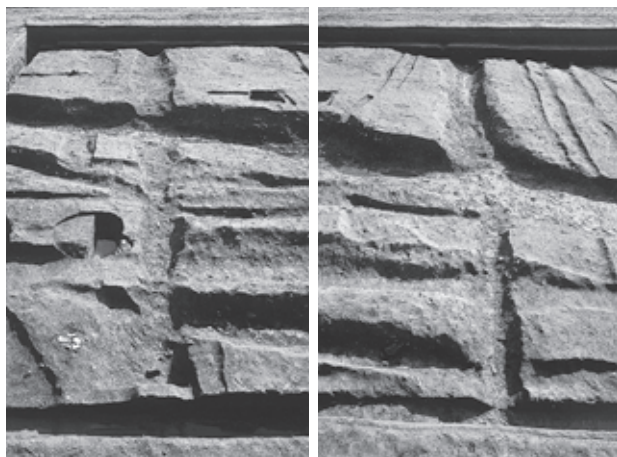


図124 SD10930(左)とSD10932・SD10931(右) 検出状況(北から)

第60-8次調査から想定される位置に南北溝SD10930を検出した。SD10930が中世に埋没したことはほぼ確実であろうが、この溝の最下層から土師器坏CⅢが出土しており、開削は古代にさかのぼる可能性もある。条坊側溝が藤原京廃絶後も何らかの形で利用されていた可能性もあり、条坊遺構の廃絶過程については今後検討すべき課題といえよう。西側溝については、第69-8次調査(『藤原概報23』)および第69-12次調査(『藤原概報24』)から想定される位置に遺構は検出されなかったが、想定位置より少し西に平安時代に埋没した南北溝SD10933を確認している。また、SD10930は西二坊大路想定位置のほぼ中央にあたる。この溝は下層から本薬師寺創建瓦が出土したことから古代に機能していた可能性もあり、条坊関連遺構のありかたについても今後検討する必要がある。いずれにせよ、調査地周辺には条坊遺構の遺存する可能性も十分残されており、さらなる調査がまたれる。

また今回の調査では、弥生時代から中世にいたるまで各時期の遺構を確認し、土地利用がおこなわれている様相がうかがえた。中世には東西方向の溝を数度にわたり掘削しなおす様子が確認された。調査地周辺では第69-9次調査(『藤原概報23』)でも中世の遺構が確認されている。調査地周辺、特に東側に集落が営まれていた可能性が指摘できる。

弥生時代の遺構を調査区内で複数確認しており、調査地は四分遺跡の集落の一部であったと考えてよいだろう。しかし住居跡や墓地などは確認されず、集落の周縁部であったことがうかがえる。四分遺跡の集落構成を考察するうえで重要な知見を得たといえよう。
(番)